様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２２４２００４

研究課題名（和文）近現代世界の自画像形成に作用する《集合的記憶》の学際的研究

研究課題名（英文）The Indiciplinary Collective Memory Studies focused on the Identity Building in Modern and Contemporary World

研究代表者
岩崎　稔（Iwasaki, Minoru）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：１０２０１９４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　34,600,000円

研究成果の概要（和文）：東アジアを中心とした集合的記憶の動態を、「自己確証的想起」及び「脱中心化的想起」という対概念を方法論として解明した。また分析地域を拡大し、ジェンダー論等の具体的成果の再定義や表象文化分析を行った。その結果、集合的記憶の脱中心化的機能は、ナショナル・アイデンティティを相対化・異化し、支配・被支配関係を転換する効果を持つことが明らかになった。脱中心化的想起という視点を通して、正統的歴史叙述から排除された「消去された声」の再生だけではなく、集合的記憶の動態の中に起こりうるイデオロギーを超えた自己撞着や恣意的操作、アイデンティティポリティクスへの批判的な分析視点をより明確に提示できるようになった。

研究成果の概要（英文）：We have analyzed the problematics of national memories in East Asia through the methodological dichotomy of “Recollection” and “Anamnesis”, extended the field to South-East Asia and Europe, with the conscious analytical tools as gender theories and critical histories, and reconsidered various cultural representations and discourses from the perspective of collective memory and its dynamics. As a result it is concluded that the “Anamnesis” could not only make the phenomena of national identities suspended, but also deconstruct them effectively, while the “Recollection” could function, when warped or isolated, as a grotesque narcissism and autointoxication. Then we would have an adequate understanding on the collective memory, it would be possible to overcome the warped relationship of “Anamnesis” and “Recollection.”

研究分野：哲学、思想史、記憶論

キーワード：想起　集合的記憶　東アジア　脱中心化的想起　自己確証的想起　歴史　思想史　哲学

１．研究開始当初の背景

（1）ヨーロッパ、アジア、アメリカの全域において、1990 年代以降同時代的な現象として記憶や想起という視点を含んだ研究が生乱された。そして、従来見えてこなかった様々な問題が主題化され、近現代世界の思想文化研究のアプローチに方法論上の変化が現れてきた。一方、日本語圏においては戦争の記憶や従軍慰安婦の問題など、記憶という述語を用いた論争があるにも関わらず、集合的記憶の動態を理論的、方法論的なレヴェルも含めて自覚的に解明する関心が相対的に希薄であった。それゆえ、集合的記憶や想起という視角を用いて近現代の歴史と文化を解釈し直し、新たな歴史理解をもたらす必要があると考えた。

（2）また、本研究開始に当たって、発案の直接的契機になったのは、アライダ・アスマン『想起の空間−文化的記憶の形態と変遷』（水声社、2007、原著 1999）で追究されている集合的記憶の機能的動態解明の理論であった。アスマンは、これまであまり明示的に追究されてこなかった集合的記憶に関する諸概念を網羅し、新しい理論的整理を行った。アスマンによれば、集合的記憶をそれ自体が生産的な想起であり、過去を現在と未来との関係においてそのつど新しい関係を産出する創造的な過程である。その想起の過程において「リコレクション」と「アナムネーシス」という対概念を利用した。「リコレクション」とは快い過去の想起を意のままに求めることであり、「自己確証的想起」と呼べる機能である。「アナムネーシス」とはこれに対して自己アイデンティティを確認するための想起を越えるような想起であり、「脱中心化的想起」と呼べる機能であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、アスマンが明示した「リコレクション」＝「自己確証的想起」および「アナムネーシス」＝「脱中心化的想起」という対概念を用いて、多様な地域と時代における集合的記憶の具体的事例を理論的、方法論的に読解し、その脱中心化的機能の特質を学際的に解明することである。

「自己確証的想起」は、しばしばナショリスティックな「歴史叙述や文化表現」すなわち、「近現代世界の自画像」のなかに見いだされるが、「自己確証的」志向性が肥大化した場合には、自己をより強く構築したいという欲望を突き破り、集合的記憶を都合のよいように改竄し、歴史叙述や文化表現にはエスノセントリックな面が強く出てくる可能性が生まれる。他方、近現代世界の様々な自己理解に表現される集合的記憶の動態には、そうしたセルフアイデンティティを相対化し、異化する「脱中心化的」志向性も現れている。近年の集合的記憶論の成果は、想起の過程がつねにこの二つの志向性を持っており、さらに、しばしば両機能の相克として出現するということを教えているのである。

そこで本研究では、集合的記憶のこうした複雑なあり方を研究史とその成果を踏まえて、内的構造、機能、動態を近現代の多様な地域と時代の具体的なコンテクストに即しつつ、学際的に究明することにした。

３．研究の方法

上記目的を遂行するために、A 班「東アジアの記憶の場」、B 班「個別文化史研究」、C 班「表象文化」、D 班「集合的記憶の理論」の四つの班を編制した。また年度計画に合わせて仮説＝問題の枠組（二つの集合的記憶の機能論）の提示段階、検証＝仮説にもとづく事例研究ないし調査、書き直し＝具体的事例の再叙述実践の段階を設定した。その上で各班に課題を課し、年次計画に沿って、基盤研究会活動、文献資料収集、整理、国際シンポジウム、調査と研究交流、共同研究支援・統括体制の構築を行うべく活動した。

各班の課題は、以下の通りである。

A：「東アジアの記憶の場」班

日本、朝鮮、中国、台湾を中心とした近現代の歴史叙述における集合的記憶の鍵となる概念を選択し、それを具体的に叙述する。

B：「個別文化史研究」班

東アジア以外のヨーロッパ、アジア、アメリカの個別的な文化的自己表象や歴史叙述の読解を手がかりとして、集合的記憶の多様な事例分析、検討を推進する。

C：「表象文化」班

近現代の思想文化表現のなかで、最も類型的な事例を選択しつつ、そこに作用している集合的記憶と想起の契機を、図像資料を用いながら解読する。

D：「集合的記憶の理論」班

想起過程の動態を解明するための理論的、方法的概念を学際的なアプローチで探求する。

４．研究成果

5 年間にわたり、上記方法を用いることで、地域別、解析手法を用いて具体的な事例が分析され、理論的にまとめられた。

A 班・D 班：研究代表者岩崎稔が日本、韓国、中国、台湾の研究者とともに、「東アジアにおける記憶の場」研究プロジェクトを立ち上げ、ハーヴァード大（アメリカ合衆国）で開催された Modern Japan History Workshop（2010 年）で「東アジアにおける記憶の場をめぐって」と題する報告を行い、ライプツィヒ大東アジア研究所（ドイツ）主催の「日本近現代思想を書き直す」（2010 年）において「1960 年代の集合的記憶」を組織した。その成果は、まず、今井昭夫・岩崎稔編『記憶の地層を掘る―アジアの植民地支配と戦争の語り方』（お茶の水書房、2010）、そして板垣隆太、鄭智泳、岩崎稔編『東アジア記憶の場』（河出書房新社、2011）としてまとめられた。2012 年には東アジアの出版人を招聘し、国際シンポジウム「東アジア出版人会議、東アジ

ア文化地図の共有に向けて-感情記憶をどのように描くか」(東京外国語大)を主催した。これらの「東アジアにおける記憶の場」プロジェクトを通して、複数の地域・国民国家にまたがる共通事項について、それぞれ異なった記憶・想起があるのはもちろんのこと、それらが縦横無尽に関係性をもちながらも脱中心化的機能を果たしていく可能性を確認することができた。

この経験から、本研究の課題であった「自己確証的想起」および「脱中心化的想起」の関係性を明示する上で、様々な学問分野と記憶・想起を結びつけて考察する試みが重要であることが判明したため、研究年度の後半は戦後日本の精神史、ジェンダー論、民衆史といった分野の研究者との共同作業を行った。2012 年には国際シンポジウム「日本近現代思想史を書き直す-戦後日本というアムネジア」(早稲田大)においてライプツィヒ大からシュテフィ・リヒター、コーネル大から酒井直樹を招聘し、戦後日本における精神史を記憶と想起という観点から議論し、集合的記憶論を広いパースペクティヴから構築する足がかりを得た。2013 年は韓国から鄭智泳(梨花女子大)を招聘し、ジェンダーと記憶の場について、さらに民衆史家安丸良夫をアメリカ合衆国に派遣し、East Asian Studies Workshop(ニューヨーク大)で「戦後日本における「民衆」の感情記憶」、Modern Japan Workshop 2013 in fall(コロンビア大)で「民衆史における記憶と情動」という報告を行い、民衆史という視点から記憶を考察した。日本民衆史の知見を得て、「民衆」の感情がいかにして記録され、記憶されてきたのかについて議論した。そこから、近現代における「民衆蜂起」、社会における「民衆」意識の形成とそこに含まれる他者性、すなわち「民衆」を作り出すことによって浮き上がる権力の存在と「自画像形成」との関連性について確証を得た。最終年度である 2014 年には、国際シンポジウム「文化と記憶のポリティクス」(早稲田大)を開催し、冷戦文化、琉球文学、民衆文化と政治といった視点から総体的に東アジアにおける記憶と想起について議論した。また、カナダ・トロント大で開催された Transnationalizing Sites of Memory: The Asia Pacific に岩崎および Kim Sukwoo(韓国・圓光大学校師範大)、富山一郎(同志社大)を派遣した。そこではアジア・太平洋地域の記憶の場を国民化する現象をのり越える方向性、つまり脱中心化的想起を具体的事例で考察する機会を得ることができた。

これらの成果は、理論的・方法論的な面を含めて、日本語版『東アジアの記憶の場』および韓国語版『東アジアの記憶の場』(韓国・サミン社、2015)となって表されている。

B 班:集合的記憶を拡大地域的な観点から考察するために、東アジア以外の地域における集合的記憶の事例研究を行った。研究代表者が IUC ドゥロヴニク(クロアチア)で開催された「ハンナ・アーレンと記憶の問題」題するワークショップで Identity Discourse in Europe という報告を行った。そこでは、ヨーロッパにおける自己アイデンティティの言説が、自己確証的想起と脱中心化的想起の双方から構成されていることに着目した。2011 年は東京外国語大アジア・アフリカ言語文化研究所の招聘教授マルティン・グロースハイムにベトナム戦争以降の記憶について報告(Contested Memory: Presentations of the Past in Vietnam)を依頼した。ドイツ人である研究者が他者として、ベトナム戦争以降のベトナムの記憶を研究する意味と課題が提示された。メディアおよび聞き取り調査を通じて実践される優れた記憶・想起論であった。2014 年には、ピエール・スイリ(スイス・ジュネーブ大)を招聘し、「ヨーロッパにおける『日本』像の形成と集合的記憶」と題する報告を依頼し、さらに、「『アジア・太平洋の記憶の場』研究における『ヨーロッパの記憶の場』から学ぶこと」を開催し、ヨーロッパにおける日本像とアジア・太平洋地域におけるにヨーロッパ像についての比較研究の総まとめを行った。また、小田原琳を国際ワークショップ「平和と正義の表象」に派遣し、多国間における戦争と記憶に関する自己認識の相違と共通点について議論を行った。

諸地域における社会内在的な記憶と想起を間地域的に省察することを通じて「東アジアにおける記憶の場」を改めて各種のメディアを通じて拡大し、一方では間接的な「自画像形成」が行われるとともに、それに対抗する「脱中心化的」想起も惹起することが判明した。

C 班:表象文化班は、映画、身体表現、音楽といった領域と集合的記憶の連関性を問い、一定の空間を越えて広がる記憶・想起の可能性を追究した。2013 年に「スカーフ論争　植民地主義によるジェンダー差別か、共生のための論理か」を開催し、ピエール・テヴァニアン(フランス)、徐阿貴(お茶の水女子大)、菊池恵介(同志社大)、森千香子(一橋大)を招聘した。フランス社会における移民労働者への差別についての記憶を議論した。特に映画という媒体を通じて、事件を想起し/させることと「自画像」形成の連関性を問うとともに、映画作成、撮影、上映、観客とネット等の大衆メディアの拡大を通じて形成される集合的記憶と「自画像」形成、さらには「脱中心化的想起」の役割について議論した。そこから、映画という文化的媒体を通じて表現された記憶は、特にノンフィクションの場合、脚本家や監督の意図とは別次元で派生する集合的記憶が存在することが判明した。また、オランダで活躍するパフォーマンス・アーティスト岩岡傑を招聘し、「パフォーマンスを通じて考える HIBAKU の記憶-アート、日常、そして記憶すること-」を開催した。加

えて、ザルメン・ムロテックを招聘し、「ディアスポラ音楽の現在−ホロコーストの記憶とイディッシュ文化」と題する講演会を開催した。音楽という文化的営為やパフォーマンスという身体表現に刻まれた記憶からも、社会の一般常識を覆す集合的記憶が構築可能であることが判明した。すなわち、登場人物たちの行為・発言とそれを見る観客との間に生み出される仮想空間的「集合的記憶」の場である。その「集合的記憶」は、時として映画制作者たちの当初の意図を破壊していく異議申し立てにも発展する可能性があることがわかった。

以上の多面にわたる事例研究により集合的記憶の動態には、自己のアイデンティティを確認しようとする「自己確証的想起」とそれを相対化し、異化しようとする「脱中心化的想起」という二機能があることが確証された。そして「脱中心化的想起」には、(1) 支配的な集合的記憶を個々人の意識において、通常ならば「自己確証的」な自画像（たとえばナショナル・アイデンティティ）を形成させるところを、直接的間接的な手段（聞き語り、読書、記念碑、写真・映画・音楽といった表象メディア、身体表現等）を通じて、むしろ破壊し、克服することで、新しい集合的記憶を創造する場合があることが判明した。しかしながら、(2) かつて支配・被支配関係にあった地域においては、上記の「脱中心化的想起」が本来的な機能を果たさないケースも存在した。すなわち支配側による「脱中心化的想起」は、被支配者側の「自己確証的想起」を生み出し、それが現社会における諸国民国家の正当化、国家権力によるナショナリズムへと統合される可能性をも生じさせた、ということである。その際、国家ナショナリズムに絡め取られない集合的記憶をいかにして構築するか、という問題が新たに生ずる。そのときこそ、被支配者側による「脱中心化的想起」が重要な役割を果たす。つまり、「脱中心化的機能」は、ナショナル・アイデンティティを相対化・異化する特質をもち、支配・被支配関係を転換していく効果を持つということである。こうして、「脱中心化的想起」という視点を通して、ただたんに正統的な歴史叙述から排除された「消去された声」の再生だけではなく、ともすると集合的記憶の動態のなかに起こりうる、イデオロギーを超えた自己撞着や恣意的操作、さまざまなアイデンティティポリティクスという現象に対する批判的な分析視点をより明確に提示することができるようになったのである。本研究は、東アジアという広範囲にわたる地域を対象にして集合的記憶論構築を実践する際に、上記の問題点を十分に意識し、複合的「脱中心化的想起」の手法を構築することに努めた。その成果は、『東アジアの記憶の場』が日本語のみならず韓国語で出版されたことに示された。

5.　主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　24 件）

①金井光太朗「アメリカン・システムのマニフェスト−ヨーロッパ公法秩序とモンロー・ドクトリン」『アメリカ研究』、査読無、49、2015、1-19 頁。
②Kotaro KANAI、*The Two Concepts of Constitutionalism and the Popular Sovereignty: A Comment on Prof. Grays Borderland in the Heartland*、『同志社アメリカ研究別冊』、査読無、22、2015、69-73 頁。
③今井昭夫「書評：伊藤正子 戦争記憶の政治学−韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道」『東南アジア研究』、査読有、Vol.52、No.2、2015、338-340 頁。
④今井昭夫「ベトナムにおける戦争の記憶の「社会化」−「捕虜になった革命戦士博物館」の事例を通して」『地域研究』、査読有、Vol.14、No.2、2014、112-125 頁。
⑤今井昭夫「現代ベトナム語における漢越語の研究(5)−「越製漢語」の構成パターンについて」『東京外大 東南アジア学』、査読有、2014、102-111 頁。
⑥今井昭夫「1972 年クリスマス爆撃の記憶−ベトナム・ハノイ市カムティエン通りの被災者への聞き取り調査」『東京外国語大学論集』、査読無、2013、225-242 頁。
⑦金井光太朗「安武秀岳『自由の帝国と奴隷制』：南部プランター階級のヘゲモニーとアメリカのデモクラシー」『アメリカ史評論』、査読無、30、2013、30-38 頁。
⑧小田原琳「闘うことの豊穣」『歴史評論』、査読無、756、2013、60-69 頁。
⑨土田環「記念講演 吉田喜重氏（映画監督）『映像、あるいは映画、その反時代的考察』」『日本映像学会会報』、164、2013、4 頁。
⑩工藤光一「噂と政治的想像界―ルイ 18 世治下におけるナポレオンに関する噂:シャンパーニュ地方オーブ県を中心に」『Quadrante』、査読有、15、2013。
⑪岩崎稔他「東アジアの記憶の場」を探求して」『歴史評論』、査読無、102、2013、285-311 頁。
⑫今井昭夫「「手に鍬、手に銃」、「手に網、手に銃」　-旧北ベトナム・クアンビン省の元民兵たちが語るベトナム戦争」『東京外国語大学論集』、査読無、84、2012、325-340 頁。
⑬今井昭夫「ベトナムにおける抗米救国抗戦の記憶 -ベトナム国内・退役軍人たちの聞き取り調査からの素描」『東京外大東南アジア学』、査読有、18、2012、55−70 頁。
⑭八尾師誠「百科事典“ダーネシュ・ゴスタル”の出版と日本認識の広がり」『イスラム世界』、査読無、78、2012、46-53 頁。
⑮今井昭夫「現代ベトナム語における漢越語の研究（３）日本語の場合とは並び方が逆になる２音節漢越語」『東京外大　東南アジア

学』、査読無、17、2012、1-11 頁。
⑯工藤光一「19 世紀フランス農村世界における噂のダイナミクス」『Quadrante』、査読有、14、2012、59-79 頁。
⑰小田原琳「レベッカ・ソルニット来日記念連続企画「世界は変えられるという予感－3.11／原発人災／〈占拠〉と街頭の公共性」報告」『Quadrante』、査読有、14、2011、35-37 頁。
⑱土田環「復元の光学ーロベルト・ロッセリーニ『インディア』をめぐる異なる復元版の考察」『Quadrante』、査読有、14、2011、35-37 頁。
⑲今井昭夫「ベトナム戦争中における南部赴任幹部についての考察」『東京外国語大学論集』、査読無、82、2011、383-396 頁。
⑳今井昭夫「敵が破壊しても、われわれは進む－ベトナム北部ターイグエン省退役軍人達の戦争の記憶」『東京外国語大学論集』、査読無、83、2011、363-382 頁。
㉑土田環「東への道―1950 年代の西洋映画における「インド」」『Quadrante』、査読有、12/13、2011、67-82 頁。
㉒小田原琳「歴史の否認―植民地主義史研究に見るイタリア歴史修正主義の現在」『Quadrante』、査読有、12/13、2011、197-217 頁。
㉒八尾師誠「「ホメイニー師伝」から見たイラン・イスラーム革命」『中東研究』、査読有、509、2010
㉓八尾師誠「国号「アフガニスタン」再考―〈前篇〉」『史朋』、査読無、43、2010、1-17 頁。
㉔今井昭夫「旧南ベトナム・軍事境界線地域のベトナム戦争―チティエン軍区・解放勢力側兵士への聞き取り調査」『東京外国語大学論集』、査読無、81、2010、417-433 頁。

〔学会発表〕（計　7 件）
①土田環「現代における日本映画受容の問題－ヨーロッパを中心に」、早稲田大学演劇映像学連携拠点・テーマ研究「日本映画、その史的社会的諸相の研究」成果報告会、2014 年 1 月 18 日、早稲田大学。
②金井光太朗 *Construction of the National Origin to Confirm the National Character: Sanctifying of Plymouth rock and the Creation of Puritan Image of the American Nation.* 国際シンポジウム「文化遺産保全と歴史意識」、招待講演、2012 年 9 月 7 日、イスラム自由大学シーラーズ校。
③土田環「映画における『国際性』の概念―『ニッポン』にみる川喜多長政の夢」、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携拠点、テーマ研究「日本映画、その史的社会的諸相の研究 B」、2011 年度第３回研究報告会、2011 年 11 月 5 日、早稲田大学。
④岩崎稔 *Identity Discourse in Europe: Between Fragmentation and Recomposition*、European Identity between Dictatorship and Freedom in the Twentieth Century、2010 年 6 月 10 日、ＩＵＣドゥブロヴニク（クロアチア）。
⑤米谷匡史「谷川雁と阿蘇・熊本のサークル文化運動」、シンポジウム「『サークル村』（第２期）終刊５０年記念集会」、2011 年 3 月 20 日、なかまハーモニーホール（福岡県中間市）。
⑥岩崎稔、「東アジアにおける記憶の場をめぐって」、Modern Japan History Workshop、2010 年 10 年 23 日、ハーヴァード大学（アメリカ合衆国）。
⑦米谷匡史「日中戦争期の文化抗争―帝国のメディアと文化工作のネットワーク」、シンポジウム「日本近代文学と戦争」、2011 年 3 月 20 日、愛知県立大学。

〔図書〕（計　25 件）
①濱下武志編、有斐閣、『中国の歴史 東アジアの周縁から考える』、349 頁、2015、今井昭夫、「ベトナムから見た中国近現代史」、105-130 頁。
②岩崎稔他編、サミン（韓国の出版社）、『東アジアの記憶の場』、624 頁、2015 年、岩崎稔「序文」、6-57 頁、岩崎稔「アカ」459-504 頁。
③武内房司他、有志社、『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』、313 頁、2014、今井昭夫「「ホーおじさん教」と戦争の記憶–近年のベトナム北部の民衆宗教」、290-309 頁。
④八尾師誠他編、東京外国語出版会、『画像史料論–世界史の読み方』、325 頁、2014、金井光太朗「ロックウェルが描いたアメリカ」、230-234 頁、八尾師誠「写真によるホメイニ–師表象の変化とイラン・イスラーム革命」、182-198 頁、篠原琢「バリケード上のアマゾネス–1848 年革命の女性像」、200-203 頁。
⑤土田環、春秋社、『こども映画教室のすすめ』、256 頁、2014。
⑥土田環、新日本映画社、字幕翻訳 マルコ・ベロッキオ『ポケットの中の握り拳』109 分、2014。
⑦岩崎稔他編、岩波書店、『安丸良夫６ 方法としての思想史』、415 頁、2013、岩崎稔他「座談会「方法としての思想史」をめぐって」、349-398 頁。
⑧土田環編、『ニコラス・レイ読本 We Cant Go Home Again』、208 頁、2013、土田環「帰郷まで」、8-17 頁、土田環「故郷喪失の物語」、106-115 頁
⑨岩崎稔他編、せりか書房、『立ちすくむ歴史』、286 頁、2012。
⑩北村暁夫、伊藤武編著、ミネルヴァ書房『近代イタリアの歴史―16 世紀から現代まで―』、280 頁、2012、小田原琳「自由主義の時代」、73-94 頁。
⑪見田宗介、弘文堂、『現代社会学事典』、1640 頁、2012、米谷匡史「津田左右吉」「戸坂潤」「吉野作造」「和辻哲郎」。
⑫土田環他編、川崎市民ミュージアム、『嘘

の色、本当の色―脚本家荒井晴彦の仕事』、324 頁、2012。
⑬岩崎稔他編、せりか書房、『カルチュラル・スタディーズで読み解くアジア』、314 頁、2011。
⑭板垣隆太、鄭智泳、岩崎稔編、河出書房新社『東アジア記憶の場』、400 頁、2011。
⑮武内房司編著、明石書店、『越境する近代東アジアの民衆宗教』、373 頁、2011、今井昭夫「仏領期ベトナムの『善壇』と民族運動」、297-318 頁。
⑯二宮宏之、岩波書店、『二宮宏之著作集３ソシアビリテと権力の社会史』、440 頁、2011、工藤光一「解説」、417-436 頁。
⑰日伊協会監修、丸善出版、『イタリア文化事』、912 頁、2011、小田原琳「南北格差」718-719 頁。
⑱土田環他編、シネマトリックス『ペドロ・コスタ［溶岩の家］スクラップ・ブック』、142 頁、2011。
⑲工藤光一他編、岩波書店、『二宮宏之著作集１―全体を見る眼と歴史学』436 頁、2011。
⑳岩崎稔他、岩波書店『ノーマ・フィールドは語る―戦後・文学・希望』、63 頁、2010 年。
㉑今井昭夫・岩崎稔編、御茶の水書房、『記憶の地層を掘る―アジアの植民地支配と戦争の語り方』、266 頁、2010。
㉒金井光太朗共訳、慶應大学出版会、ゴードン・S・ウッド『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』、392 頁、2010、金井光太朗担当 131-244 頁。
㉓深沢克己、桜井万里子編、東京大学出版会、『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史―古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』、篠原琢「第五章　ヨーゼフ寛容令と「狂信者」―チェコ農村における非カトリック教徒」、155-198 頁。
㉔米谷匡史、グリーンビー出版（韓国・ソウル）、『アジア／日本』、272 頁、2010。
㉕北村暁夫・小谷眞男編『イタリア国民国家の形成―自由主義期の国家と社会』、日本経済評論社、305 頁、2010、小田原琳「「南部」とは何か？―南部問題論における国家と社会」197-217 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岩崎　稔　　（IWASAKI MINORU）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：10201948

(2)研究分担者
八尾師　誠（HACHIOSHI MAKOTO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号： 20172926
今井　昭夫（IMAI AKIO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：20203284
金井　光太朗（KANAI KOTARO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：40143523
篠原　琢（SHINOHARA TAKU）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：20251564
米谷　匡史（YONETACHI TAKASI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：1260399927
工藤　光一（KUDO KOICHI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：80255950
小田原　琳（ODAWARA RIN）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師
研究者番号：1260399924
土田　環（TSUCHIDA TAMAKI）
日本映画大学・映画学部・准教授
研究者番号：70573658